札幌大学総合論叢　第三号（一九九七年三月）

〈論文〉

詩劇「虹」

原子　修

〈登場人物〉

ペケレ（少年）
レラ（少女）
ペケレの父
ペケレの母
ペケレの伯父
ペケレの伯母
ペケレの叔父
ペケレの叔母
ペケレの従兄
ペケレの従姉
ペケレの従弟
ペケレの従妹
レラのおじいちゃん
レラの兄
レラの弟
レラの伯父
レラの伯母

レラの叔父
レラの叔母
レラの従兄
レラの従姉
レラの従弟
レラの従妹
鴬の妖怪ハヒフヘホケッチョ
ヤチブキの妖怪キラーラ
朝露の妖怪ポロポロ
モモンガーの妖怪フワーテピュー
シマリスの妖怪チョロッチ
ヒグマの妖怪ワォーレ
オオカミの妖怪ホホーレ
シカの妖怪デモーネ
小鳥たち
花たち
木の葉の妖怪ハッパッパ1、2、その他
木の根の妖怪ネッコッコ1、2、その他
ヤマビイコの声
猛暑の声

大雨の声
猛吹雪の声

〈時〉

縄文時代

〈場所〉

北の島の　川をはさんだ海がわの岸と山がわの岸　森　岩場　けわしい山の断崖

1

はじめ暗黒
黄金のかけらがこぼれちるような音
やがて
光の波紋がひろがり
金いろのしらべがこだまして
風が吹く
光のキラキラした渦の中心にたちつくす少年ペケレのシルエット
やがて
目をつぶり
りょう腕で胸をかきいだいた少年のすがたがじょじょに
スポットライトにうかびあがる
ペケレ
「いったいどうしたというのだろう　だれかのすきとおった指がぼくの心臓をくすぐっているような
とっても変な感じがしてくる
いったい　どうしたというのだろう」
甘美な音楽
ペケレのうた
「風だろうか

いま
川のむこう岸の
クマザサのヤブで
うまれでようとしてるのは
水のようにすきとおった
風だろうか」
甘美な音楽たかまる
ペケレのうた（踊りながら）
「それは
ほんとうだろうか
いま
川のむこう岸の
クマザサの葉をゆらしながら
だれかが
光よりもすきとおった風に
うまれかわろうとしているというのは」
甘美な音楽　いっそうたかまる
ペケレのうた（たちどまって）
「ああ
それは

（三四）

ほんとうなのだろうか
いま
クマザサの緑にぬれた手を
つばさのようにうちふって
風のすがたに身をやつした
だれかが
むこう岸のほうから
ぼくにむかって
しずかに
吹きはじめようとしているというのは」
甘美な音楽　絶頂に達し
合唱の声
「だれ
それは
だれ」
ペケレ　りょう手を天にのべ　たちつくす
突如　破壊的な音響
光の血まみれな狂乱
弓矢をもった男たちと棒をもった女たち乱入
ペケレをつきとばして狂舞

破壊的な音楽にあわせて
海がわの岸の男たちの合唱
「この川は」
海がわの岸の女たちの合唱
「わたしたちの川」
ペケレの父のうた
「鮭も」
ペケレの母のうた
「烏貝も」
ペケレの伯父のうた
「みんな」
ペケレの伯母のうた
「海がわの　こっちの岸の」
海がわの岸の男たちの合唱
「おれたちのもの」
海がわの岸の女たちの合唱
「わたしたちのもの」
ペケレの叔父のうた
「けっして　けっして」
ペケレの叔母のうた

「山がわの　むこう岸の」
海がわの岸の男たちのうた
「やつらのもじゃあ」
海がわの岸の女たちのうた
「ないわ」
音楽切断
光　平静
ペケレ
「（たちあがって　父にとりすがり）でも　おとうさん　それはちがいます　この川も　鮭も　烏貝だって
りょう岸にくらす　みんなのものじゃあ　ありませんか」
ペケレの父
「（ペケレをふりはらい）じゃあ　ペケレ　この二、三年　川にのぼってくる鮭が　めっきりすくなくなった
わけを　言ってみろ」
ペケレの母
「（ペケレの肩を抱き）そればかりじゃあないのよ　ペケレ　さいきん　川底の烏貝が　ほとんど　すがたを
けしてしまったのを　どうおもうの？」
ペケレ
「……」
ペケレの父
「（いきりたち）あいつらだ　むこう岸のあいつらが　川に簗（ヤナ）をしかけて　鮭をとりまくったからだ」

（三七）

ペケレの母
「（いきりたち）川底の　ちいさな烏貝まで　とりつくしたからよ」
ペケレ
「（母の手をとって必死に）それなら　おかあさん　まず　むこう岸のひとたちと話しあうべきです
弓矢や棒をふりかざすのは　けっして　かしこいやりかたとはいえません」
ペケレの従兄のうた
「もう　ておくれだ」
ペケレの従姉のうた
「鮭が川にのぼってくる」
ペケレの従弟のうた
「はやく決着をつけないと」
ペケレの従妹のうた
「わたしたち　飢え死によ」
不吉な音楽
ペケレの母のうた
「ゆうべは
夜空を
あおじろい尾をひいて
ホーキ星が
はしったわ」

ペケレの父のうた
「太陽は
つめたい雲の冠をかぶって
くらく
おしだまり」
ペケレの伯母のうた
「川のこちら岸は
海にちかいというのに
いつのまにか
ウグイやエビがすがたをけし」
ペケレの伯父のうた
「鯨も
よりつかなくなってしまった」
ペケレの叔母のうた
「春だというのに
氷が
川をまっしろにおおい」
ペケレの叔父のうた
「夏になっても
カンゾウの花も咲かない」

（三九）

ペケレの従姉のうた
「川のむこう岸は
山がわで
ゆたかな森がおいしげっている
というのに」
ペケレの従兄のうた
「もはや
アカシカ一匹
ヒグマ一頭だって
すがたをあらわさないという」
ペケレの従妹のうた
「ああ不吉だわ」
ペケレの従弟のうた
「神々が
おれたちをみはなそうとしている」
ペケレの父
「（いきりたち）あいつらだ　むこう岸のあいつらが　山の神のごきげんを　そこねたのだ」
ペケレの母
「（いきりたち）あいつらが　梁（やな）などをつくって　神々の　気にさわることを　しでかしたんだわ」
ペケレの伯父

「（いきりたち）それで　こちらの岸の　海の神までが　つむじをまげてしまったのだ」
ペケレの伯母
「川の神　魚の神までが　わたしたちを　みはなそうとしている」
ペケレの叔父
「（弓矢をふりあげ）鮭が　のぼってくるまえに　むこう岸のやつらと　決着をつけよう」
海がわの岸の男たち
「（弓矢をふりあげ　ときの声をあげて）決着をつけよう」
ペケレ
「（たちはだかり）やめて！　あらそうのはやめて！」
甘美な音楽
ペケレのうた
「おとうさん
おかあさん
おねがいですから
いま
むこう岸から
ぼくにむかって
そっと吹きはじめようとしている
うつくしい風のほうへと
弓矢をふりかざしていくのは

（四一）

やめて」
ペケレの母
「（ペケレをつきとばし）かわいいおまえの　たべもののためだってことが　わからないのかい」
ペケレの父
「（ペケレをつきとばし）いとしいわが子を　飢え死にさせないために　さあ　いこう」
海がわの岸の男たち
「（弓矢をふりあげ　ときの声をあげて）さぁ　いこう」
ペケレの叔母
「（棒をふりあげ）子どもや　年よりのいのちをまもるために」
海がわの岸の女たち
「（棒をふりあげ　ときの声をあげて）さぁ　いこう」
破壊的な音楽
光の　血まみれの狂乱
海がわの岸の　男たちと女たち　行進
ペケレの従兄
「この弓につがえた
するどい毒矢で
むこう岸のやつらの心臓を
うちぬこう」
海がわの岸の男たち

「うちぬこう」
ペケレの従姉
「この手ににぎった
かたい棒で
むこう岸のやつらのつくった梁(やな)を
うちこわそう」
海がわの岸の女たち
「うちこわそう」
ペケレ
「(行進のゆくてにたちはだかり)おねがいだから　やめて!」
ペケレの母
「(ペケレをつきとばし)これも　みんな　おまえのためだってことが　わからないのかい」
海がわの岸の男たち
「わからないのか」
海がわの岸の女たち
「わからないのか」
破壊的な音楽　ますますたかまり
光の血まみれの狂乱　めくるめく
やがて
男たちと女たち　ペケレをふみにじって去り

(四三)

しだいに沈黙
溶暗
ペケレ　スポットの中にうち伏してすすり泣き
しずかに上半身をおこす
甘美な音楽
ペケレのうた
「おとうさん　おかあさん
おねがいですから
いま
むこう岸から
ぼくにむかって
そっと吹きはじめようとしている
うつくしい風のほうへと
棒をふりかざしていくのは
やめて」
やがて　沈黙
ペケレ
「（しずかに　たちあがり）でも　やっぱり　ぼくは　みんなを　とめにいこう」
ペケレ　はしりさる
溶暗

沈黙

2

とおくから　攻めよせてくる声
パッと　破壊的な音楽
光の　血まみれの狂乱
レラの兄の声
「海がわの岸のやつらが　川をわたりはじめたぞ」
レラの伯母の声
「わたしたちが　汗水たらして仕掛けた簗(やな)を　こわしはじめたわ」
ピェーッという縄文笛の音
レラの伯父の声
「弓と矢で　やつらを　追っぱらえ」
山がわの岸の男たちの声
「追っぱらえ」
ドドドドッと　縄文太鼓の音
レラの叔母の声
「石のつぶてを　雨霰とふらして　やつらを　追いかえせ」
山がわの岸の女たちの声

「追いかえせ」
レラの叔父の声
「でないと　おれたち　いっぴきの鮭も　とれなくなるぞ」
レラの従姉の声
「でないと　わたちたち　飢え死にしなければならなくなるわ」
ピェーッという縄文笛の音
ドドドドッという縄文太鼓の音
山がわの岸の男たちの声
「（ときの声をあげ）攻めかえせ　追いちらせ」
山がわの岸の女たちの声
「（ときの声をあげ）うちのめせ　追いかえせ」
ますますたかまる破壊的な音楽
ますますはげしくなる　光の　血まみれの狂乱
山がわの岸の　レラと兄　もつれあいながら出現
レラ
「（兄にとりすがり）やめて　おにいちゃん」
レラの兄
「（弓矢をふりかざし　レラをふりきって）敵意の牙をむきだし　地ふぶきの勢いで攻めてきたのは　あいつらじゃあないか　ぜんしんの血を　山火事のように焚いて　あいつらとたたかうのに　どんなやましさがあるというのだ」

レラ
「（なおもとりすがり）暴力は　はじめは　相手にむかっていくけれど　いつか　きっと　くるりとむきをかえ　暴力をふるうひとじしんに　おそいかかってくるわ」
レラの兄
「レラ　おまえが　兄の身をおもって言う気持は　すきとおった小川の底をのぞきみるように　よくわかるだが　いまは　ちがう
いまは　海がわの岸から攻めてきたあいつらを　力づくでくいとめなければ　おれたちの村は　あいつらの敵意の野火で焼きはらわれ　おじいちゃんやおばあちゃんがまもりそだてきたこの村は　かげろうよりもはかなく消えうせるのだ」
レラ
「（必死に）かしこいものは　言葉の力をしっているわ　どんな矢よりもふかく相手のこころの奥そこにとどき　どんな石つぶてよりもとおく相手のおもいの空にたどりつく　言葉の力を信じているわ　ねぇ　おにいちゃん　おねがいだから　話しあって　山がわの岸にすむわたしたちも　海がわの岸にすむあのひとたちも
おなじ言葉という　神様からいただいた　なによりの宝物をともにもつ　人間どうし
話しあえば　きっと　暴力が　悪魔の贈り物だとわかるわ　それに支配され　ついには　ともにほろびることのおろかしさに　気がつくわ」
破壊的な音楽
光の　血まみれの狂乱
りょう岸の男たちと女たちのときの声　交互に木霊しあう
レラの兄

（四七）

「（レラをふりきり）みんなが　いのちがけで　矢傷を負い　棒でうたれ　血をながしながら戦っている
というのに　おれだけが　かわいい妹と　無益なおしゃべりに　うつつをぬかしているわけにはいかん
レラ！　やっぱり　おれは　行くぞ　行って　おまえや　年老いたおじいちゃんや子どもたちのために
やつらと戦うぞ」
レラ
「（ひっしにとりすがろうとして）おにいちゃーん」
レラの兄　力づくでレラをおし倒し　去る
ピェーッという縄文笛の音
ドドドドッという縄文太鼓の音
しだいに沈黙
溶暗
レラ　スポットの中にうち伏してすすり泣き
しずかに上半身をおこす
甘美な音楽
レラのうた
「おにいちゃん
おねがいですから
いま
むこう岸から
わたしにむかって

（四八）

そっともえはじめようとしてる
ふしぎな光のほうへと
弓矢をふりかざしていくのは
やめて」
やがて　沈黙
レラ
「（しずかに　たちあがり）だけど　やっぱり　わたし　おにいちゃんを　とめにいくわ」
レラ　はしりさる
溶暗
沈黙

3

暗黒の世界
破壊的な音楽
光の　血まみれの狂乱
山がわの岸のひとびと　レラの兄を先頭に
弓矢や棒や石くれをもって　戦いの踊り（以下すべてスローモーションで）
海がわの岸のひとびと　ペケレの父を先頭に
弓矢や棒や石くれをもって　戦いの踊り

音楽と光にあわせ
たがいに　矢を射ちあい　棒でなぐりあい
石くれを投げあい　スローモーションで踊る
海がわの岸のひとびとのうしろで　けんめいにさけぶペケレ
ペケレ
「やめて！　やめて！
おとうさん　おかあさん　あらそうのは　やめて！」
山がわの岸のひとびとのうしろで　けんめいにさけぶレラ
レラ
「やめて！　やめて！
おにいちゃん　暴力は　やめて！」
わきおこるかん声
入りまじる悲鳴
山がわの岸のひとびとのうしろで　おろおろしていたレラのおじいちゃんに　石くれがあたる
レラのおじいちゃん
「あっ！」
音楽と光　停止
ひとびと凍る
倒れ伏すおじいちゃんにスポットが降る
レラ

（五〇）

「（スポットの中で）おじいちゃーん！（エコーでさけびつつ　おじいちゃんのほうに　スローモーションで近づく）」
その間に
山がわの岸のひとびと　スローモーションで去る
ペケレ
「（スポットの中で）あっ　あの声は　風だ　山がわの岸から　ぼくにむかって吹きはじめた　あの風が
やっと　いま　ぼくのまえに　すがたをあらわしたのだ（りょう手をのべ　スローモーションですすむ）」
その間に
海がわの岸のひとびと　スローモーションで去る
くるしむおじいちゃん
レラ
「（おじいちゃんのほうにかがみこみ）まぁ　ながれ弾のようにとんできた石のつぶてで　眉間が　浜薔薇の
実のように　はじけているわ」
ペケレ
「（木の葉をさしだし）この　ドロヤナギの葉っぱを　傷口にあてれば　血がとまるよ（じぶんの鉢巻をはず
して　おじいちゃんの傷口に巻く）」
レラ
「（ふりかえって）あっ　その声　どこかできいたような気がする」
ペケレ
「（手をうごかしながら）ぼく　ペケレ　海がわの岸にすんでいるんだ」
レラ

（五一）

「ペケレ……光という意味ね　やっぱり　そうだったんだわ　むこう岸のほうから　そっと　わたしにむかって　もえはじめようとしていた　あの　ふしぎな光が　あなただったんだわ」

ペケレ

「（おじいちゃんを背負おうとして）そして　君は　レラ……風という名の　女の子？」

レラ

「はじめて会ったのに　どうして　それが……」

ペケレ

「手をかしてくれない？（おじいちゃんを背負ってあゆみだし）ぼくたち　きっと　この川のりょう岸にうまれおちる　そのずっと以前から　ひとすじのおなじあけぼのの糸をつまびいていた　ふたりでひとつのいのちだったのかもしれない」

レラ

「（おじいちゃんに肩をそえてあゆみつつ）わたしたち　きっと　おなじ空で　ひとすじの虹の旋律をかなであう　光と風なんだわ」

おじいちゃん　うめく

ペケレ

「おじいちゃん　だいじょうぶ？」

レラ

「もう　すぐ　森だわ　平和なやわらかい草むらが　おじいちゃんにやすらかな寝床を用意してくれているわ」

レラのおじいちゃん

（五二）

「(うめいて) ああ　痛い　まるで　おでこが　火山のように　いたみの火と煙をふきだしている」

ペケレ

「あらそいの石つぶてが　キツツキのするどいくちばしのように　おじいちゃんの額に　くるしみの巣穴をあけたのだ」

レラのおじいちゃん

「レラや　親切な肩に　わしを背負ってくれている　このみしらぬ少年は　いったい　だれなんだ」

レラ

「ペケレよ　むこう岸の村の　男の子よ」

レラのおじいちゃん

「海がわの岸の？」

レラ

「ええ　そうよ」

レラのおじいちゃん

「むかしから　ことあるごとに　憎しみの牙をむき　かたきどうしとしていがみあってきた　むこう岸のものが　どうして　ここに？」

ペケレ

「こぶしをふりあげるものは　悪魔をよろこばせ　手をにぎりあうものは　神をよろこばせる……そのことを　あらそうひとたちに言いたくて　つい　こっちの岸に　きてしまったのです」

レラ

「その　やさしいこころが　わたしのおじいちゃんに　すくいの手をのべさせたんだわ」

(五三)

レラのおじいちゃん
「ありがとう　わしもなぁ　わかいころは　体中の血が　まっかな焔のようにもえさかって　つい　みにくいあらそいにくわわったこともあったが　いまは　ちがう　仲よくくらす知恵こそは　最大の武器だ　とみんなに言いたくて　いつのまにか　川岸にきてしまったんだ」
とつぜん　切断の音
破壊的な音楽
光の　血まみれの狂乱
レラの兄と　山がわの岸のひとびと　弓矢や棒をもって　あらわれる
レラの兄
「(りょう手をひろげて　ゆくてをさえぎり)おれのおじいちゃんを　どこに　さらっていく?」
レラ
「ちがうわ　おにいちゃん　たすけてくれたのよ」
レラの兄
「レラにきいたんじゃあない(ペケレに矢をつきつけ)おまえだ　風来坊のおまえにきいたんだ」
ペケレ
「森のほとりの草むらで　おじいちゃんをやすませようとおもって……」
レラの兄
「おれとレラのおじいちゃんに　なれなれしい口をきくおまえは　いったい　どこのどいつだ」
ペケレ
「海がわの岸にすむ　ペケレです」

山がわの岸の男たち
「海がわの岸？」
山がわの岸の女たち
「かたきの村？」
レラの兄
「やっぱり　おじいちゃんとレラを　海がわの岸にさらって　人質にするつもりなんだ」
山がわの岸の男たち
「さらって」
山がわの岸の女たち
「人質にするつもりなんだ」
レラの兄
「（弓矢をふりあげ）さぁ　とりかえそう　おれのおじいちゃんとレラを　海がわの岸のやつから　とりもどそう」
山がわの岸の男たち
「とりかえそう」
山がわの岸の女たち
「とりもどそう」
レラの兄と男たち女たち　ペケレの背からおじいちゃんをもぎとり　レラをひきはなす
レラ
「やめて　おにいちゃん　このひと　あらそいをとめようとしていたのよ」
レラの兄

（五五）

「（ペケレに）ほんとうか」
ペケレ
「ほんとうです」
レラの兄
「（山がわの岸のひとびとに）おれたちが苦心してつくった梁（ヤナ）をこわしにやってくる海がわの岸のやつの言うことなど信じられるか」
山がわの岸の男たちと女たち
「信じられない　信じられない」
ペケレ
「信じてください　ぼくは　じぶんのおとうさんやおかあさんにだって　むごたらしいあらそいをやめてりょうほうの岸のひとたちが　仲よくくらすべきだって　そう　言っているのです」
レラの兄
「（女たちの手から棒を二本とり　一本をペケレにさしだし）よーし　それじゃあ　この棒で　なぐりあいの勝負をしよう　そして　どちらか　勝ったほうの言うことが　ただしい　としよう」
レラ
「おにいちゃん　やめて」
レラの兄
「（ペケレに）さあ　棒をとれ　とって　おれと勝負しよう」
山がわの岸の男たち
「どっちの岸の言うことがただしいか」

（五六）

山がわの岸の女たち
「勝負しよう」
ペケレ
「（棒をうけとらず　手をうしろにくみ）弓矢で傷つけあったり　棒でなぐりあったりすれば　どちらも負けです　ひとは　たがいに　血をながして　くるしみ　悪魔だけが　勝って　ほくそえむのです」
レラの兄
「（いきりたち）だまれ　弱虫め　口先三寸のへなちょこめ　そっちが　棒を手にしないのなら　こっちは二本ともにぎって　そのぐじゃぐじゃの　くさった脳天に　バシーンとうちおろしてくれるわ！」
山がわの岸の男たち
「バシーンと」
山がわの岸の女たち
「うちおろしてくれるわ！」
レラの兄　二本の棒をふりあげる
おじいちゃん　支えるひとびとの手をふりはらって　よろめきでる
レラ
「（おじいちゃんにはしりより）おじいちゃん！」
レラのおじいちゃん
「（レラの兄とペケレのあいだに割って入り　息たえだえに）おそらくは　こんな危ない目にあう　と知りながら　あえて　わしをすくおうとしたペケレは　もう　どっちの岸のものでもない　りょうほうの岸があって　はじめて水のながれとなることのできる川そのものじゃ

（五七）

そのペケレを　棒でうちころすものは　川をうちころすもの　わしをうちころすもの　じぶんじしんをうちころすもの……（レラの腕のなかに　よろめき倒れる）」

レラ

「おじいちゃん！」

ペケレ

「（かけよって）おじいちゃん！」

レラの兄

「（ペケレをひきはなし　つきとばして　ペッと唾を吐きかけ）へん　卑怯者め　きょうだけは　みのがしてやる

だが　つぎにであったときには　いのちがないものとおもえ！」

山がわの岸の男たち

「いのちがないものと」

山がわの岸の女たち

「おもえ！」

レラの兄と山がわの岸の男たち女たち　おじいちゃんをささげもち　スローモーションで退場

溶暗

スポットの中の　おじいちゃんによりそうレラ　ふりむいて　ペケレに手をのべる

レラ

「（エコーで）ペケレー！」

スポットの中のペケレ　レラに手をのべる

（五八）

ペケレ
「（エコーで）レラー！」
暗転

4

甘美な音楽
ペケレの母の声
「ペケレ　わたしのかわいい息子（泣き声で）　よくぞ　むこう岸から　生きてかえられたわねぇ」
ペケレの父の声
「こっちの岸のものとみれば　手負い熊のようにおそいかかってくる　あの　おそろしいやつらのところにはもう　二度と　ちかよってはならんぞ」
ペケレの母の声
「（泣き声で）こんどだって　なんにんものなかまが　あいつらの矢や石にあたって　大怪我をし　いまでも血まみれのくるしみにうめいているというのに（泣きだし）ほんとうに　ペケレ　ぶじでよかったわ」
ペケレの父の声
「空気が　ぴりっと　はりさける感じになってきた　まもなく　鮭が川にのぼりはじめる　さいきんは川底をはしる銀いろの影が　めっきりへって　りょう岸のものたちは　血まなこで　あいてを警戒しているけっして　川に　はぐれ鹿のように　ちかずいたりしては　ならんぞ」
闇の底をぬう　川のせせらぎ

ペケレ
「(スポットの中で) でも　やっぱり　あの　やさしい風が　ぼくを　夜の川岸に　よびよせる」
(空をあおぎ) お月さん　いつかきっと　おとうさんとおかあさんは　ぼくを　ゆるしてくれるだろうか
(縄文笛をとりだし) むこう岸のほうから吹いてくる　うつくしい風に　あつい頬をさらすぼくを　いつか
かならず　ゆるしてくれるだろうか」
ペケレ　縄文笛を吹く
うつくしい旋律
沈黙
ペケレ
「(対岸をみやり)風だ　まちがいなく　むこう岸のほうから　ぼくにむかって　薫りたかい風が　吹いてくる」
縄文琴のしらべ
はじめ　かすかに
やがて　ひびきたかく　ながれる
縄文琴をつまびくレラ　スポットに　すこしずつ　すがたをあらわす
ペケレ
「レラだ　ぼくの　未来のほうから吹いてくる　風……いのちの風だ」
レラのつまびく縄文琴のしらべ
やがて
ペケレの吹く縄文笛のしらべとかさなり
うつくしい協奏のしらべ

(六〇)

レラ　縄文琴をつまびきながら　うたう
ペケレ　縄文笛をかなでやめ　ききほれる
レラのうた
「ペケレ
わたしの光
くらやみがふかいほど
あかるくもえて
わたしの足もとを照らしてくれる
ペケレ
わたしの光
こちらの岸と
むこう岸とをつなぐ
ペケレ
わたしの光」
縄文琴かなでやむ
ペケレ　縄文笛をふきながら
川をわたりはじめる
ペケレの縄文笛にあわせて
レラのうた
「ペケレ

原子　修

わたしの光
くるしみでいっぱいの
いくさのやみが
わたしたちのせかいからきえるよう
ペケレ
わたしの光
ふたつの岸を
へいわの糸でつなぐ
ペケレ
わたしの光」
ペケレ　川をわたりおえて
レラによりそい
レラの縄文琴にあわせてうたう
ペケレのうた
「レラ
ぼくの風
すきとおったこころの
つばさをひろげ
ぼくの耳たぶにさわってくれる
レラ

（六二）

ぼくの風
ふたつの岸を
愛のきずなでむすぶ
レラ
ぼくの風」
甘美な音楽　わきおこる
ペケレ
「（レラの手をにぎり）いま　ぼくは　山がわの岸にいて　とっても　しあわせなのに　どうして　ぼくのりょう親は
ぜったいに　海がわの岸をはなれるなって　いうんだろう」
レラ
「（ペケレの手をにぎって　ふり）わたしもよ　ペケレ　おにいちゃんは　けっして　むこう岸にすむあなたと会っちゃあいけないってゆうけれど　どうして　仲よしが　すきなときに会って　おはなししたり
うたいあったりしてはいけないの」
軽快な音楽と光にあわせて　ふたり　手をとりあって踊る
レラのうた
「ねぇ」
ペケレのうた
「どうして」
レラのうた

「どうして」
レラとペケレのうた
「どうしてなの」
ペケレのうた
「ひとつの」
レラのうた
「おなじ」
ペケレとレラのうた
「川をはさんで」
レラのうた
「こっちの岸と」
ペケレのうた
「むこうの岸が」
レラのうた
「牙をむき」
ペケレのうた
「爪をたて」
レラのうた
「ののしりあうのは」
ペケレのうた

「いさかいあうのは」
ペケレとレラのうた
「どうして
どうして
どうしてなの」
沈黙　停止
レラ
「でも　わたしたちは　ちがう」
ペケレ
「でも　ぼくたちは　ちがう」
軽快な音楽と光　おこる
ふたり　踊りだす
レラのうた
「仲よしのわたしたちは」
ペケレのうた
「じゃぶじゃぶじゃぶ」
ペケレとレラのうた
「川をわたって
りょう岸を
ひとつの岸にむすんでしまう」

原子　修

ペケレのうた
「手をつなぎ」
レラのうた
「かたりあい」
ペケレのうた
「おどりあい」
レラのうた
「うたいあう」
ペケレとレラのうた
「わたしたちは　風
ぼくたちは　光」
ペケレのうた
「自由で」
レラのうた
「平和な」
ペケレとレラのうた
「わたしたちは　風
ぼくたちは　光」
音楽やむ
ペケレとレラ　立ちつくす

（六六）

とおくから
はじめかすかに
だんだんたかく
木霊の声がきこえてくる
ヤマビイコの声（エコーで）
「自由（じゆー）でー
平和（へーいわー）なー
わたーしたーちはー　風（かぜー）
わたーしたーちはー　光（ひかーりー）」
ペケレ
「だれ？　だれの声？」
レラ
「ヤマビイコよ　森の　ずっと奥のほうから　いたずらっこのヤマビイコが　わたしたちを
よんでいるのよ」
ペケレ
「ヤマビイコ？」
レラ
「この森に　ずっとむかしからすんでいて　気がむくと　森のこころのわかるひとだけに
はなしかけてくるのよ」
ペケレ

（六七）

「なんて？」
レラ
「森にかえりましょうって」
ペケレ
「森にかえる？」
レラ
「わたしたちのこころのふるさとは　森なんだわ　そこに　かえりましょうって」
ペケレ
「ぼくも　かえっていける？」
レラ
「もちろんよ　さあ　ふたりで　声をそろえて　オーイと　よびましょう
きっと　森のずっと奥のほうから　ヤマビイコが　すがたをあらわして　わたしたちを
ふるさとの森につれてってくれるわ」
ペケレ
「ぼく　きっと　そうするよ」
レラとペケレ
「（ならんで立ち　口メガホンで）オーイ（エコーで）
メルヘンの音楽と光
ヤマビイコの声（エコーで）
「（とおくから　はじめかすかに　やがて　だんだんたかく）オホーイ」

メルヘンの音楽と光　ますますたかまって
ヤマビイコ　透明なすがたをあらわす
レラ
「（透明なヤマビイコにむかって）こんにちわ　ヤマビイコさん（握手する）」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　こーんにちーわー」
ペケレ
「どこ？　どこに　ヤマビイコが？」
レラ
「ほら　すぐ　目のまえに」
ペケレ
「（とまどって）えっ」
ヤマビイコの声
「オホーイ　ペケーレーくーん　オホーイ　手（てー）をだーして　オホーイ　握手（あくーしゅ）でーすよー」
ペケレ
「（手をだし　ヤマビイコの透明な手をにぎって）ほんとだ　目にはみえないけれど　たしかに
お日さまの陽ざしのように　ほんのりと　あったかい手が　ぼくの手を　ぎゅっと　つよく
にぎりしめてくれた」
ヤマビイコの声（エコーで）
「（ペケレとにぎった手をふり）オホーイ　ペケーレーくーん　オホーイ　こーんにちーわー」

（六九）

ペケレ
「（握手の手をふり）オホーイ　ヤマビーコーさん　オホーイ　こーんにちーわー」
レラ
「（わらって）ね　ペケレ　すこしずつ　ヤマビイコのすがたが　みえてきたでしょう」
ペケレ
「（うれしそうに）うん　霧につつまれた　森の奥から　なにか　こう　ポッと　光がさしてくるように
だれかが　すがたをあらわしてくる……ふしぎだなぁ」
レラ
「ヤマビイコは　森のこころそのものなのよ　だから　ヤマビイコのすがたがみえる　ということは
森のこころがみえる　ということなのよ」
ヤマビイコの声（エコーで）
「（三人で手をつなぎ）オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　ペケーレーくーん　オホーイ　森（もりー）に
かえーろー　オホーイ　ふーるさとーの　森（もりー）に　かえーろー　オホーイ　三人（さーんにーん）　そろーってー
オホーイ　いのーちのー　森（もりー）にかえーろー　オホーイ」
透明なヤマビイコを中心に　三人　手をつないで　スキップしながら　森の奥にはいる
メルヘンの音楽と光　急速にたかまり
その渦の中心に　三人をのみこむ
暗転
やがて
沈黙

5

あかるく　華麗な　春の光
いっせいに爆発する　さまざまな種類の小鳥の声
いろとりどりの衣裳と冠と飾りをつけた小鳥たち
かろやかな羽根をうちふって
たのしそうに　舞いおどる
鴬の妖怪ハヒフヘホケッチョのうた
「（ひときわ大ぶりな衣裳と冠と飾りをつけ　鴬いろにきらめく大きなつばさをゆったりとうちふって
まいおどり　うつくしいコロラチュラ・ソプラノで）
ハーハケッチョ
森は
春をパーン
ヒーヒケッチョ
森は
光でプーン
フーフケッチョ
森は
風にチューッ
ヘーヘケッチョ

森は
みどりへワーッ
ホーホケッチョ　ハヒフヘホケッチョ
ケチョ　ケチョ　ケケッチョ」
レラとペケレとヤマビイコあらわれる
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　うぐーいーすの妖怪（よーかいー）　ハヒフヘホケッチョーの　歓迎（かんげーい）のー　歌（うたー）でーす　オホーイ
レーラーちゃーん　オホーイ　ペケーレーくーん」
レラ
「ありがとう　鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョさん」
ペケレ
「（目をこすって）まぶしいなぁ　つい　さっきまでは　お月さまの光が　銀いろの　夜だったのに……」
鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョのうた
「ハーハケッチョ
森は
いちにちいっぱい
まっぴるまのぴるぴるま
ヒーヒケッチョ
フーフケッチョ
ヘーヘケッチョ

（七二）

ホーホケッチョ
ハヒフヘホケッチョ
ケチョ　ケチョ　ケケッチョ」
レラ
「きっと森は　まっくら闇という　かたい石のなかから　まばゆい光のダイヤモンドを　掘りだすことが
できるんだわ」
ペケレ
「そして　きっと　森は　どんな　かなしみの夜からでも　あかるい希望のお陽さまを　さがしあてるんだ」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　レーラーちゃーん　花がー　咲くーよー　オホーイ　ペケーレーくーん　春のー
いろとりどりーの　花がー　オホーイ　いっせーいにー　咲きー出すよー」
べつの　いっ層華麗な　春の光と音楽　爆発
小鳥たちのおどりにまじって
いろとりどりの衣裳と冠と飾りをつけた花たち
あでやかな花びらをうちふって
うれしそうに　舞いこみ
レラとペケレをまきこんで　おどる
ヤチブキの妖怪キラーラ
「（ひときわ豪奢な　緑いろの衣裳と金いろの冠と飾りものと花房で）キラッ　キララッ　キラキラキラーラ
ペケレくんの　こころのなかの　つらーい　おもいを　キラッ　キララッ　キラキラキラーラ　金いろに

もやせ　金いろのほのおに　もやせ　金いろの花びらに　もやせ　キラッ　キララッ　キラキラキラーラ」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　ヤチーブキーの　妖怪（よーかーい）　キラーラですよ　オホーイ　思（おも）ーいやりーの　心（ここーろ）　金（きん）いろーのキラーラですよ　オホーイ」
ペケレ
「でも　どうして　ぼくの　こころのなかが……」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「キラッ　キララッ　キラキラキラーラ　海がわの岸と　山がわの岸の　仲のわるさは　火と水いじょう……」
花たちの合唱
「火と水いじょう」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「だってことは　森じゅうの　えっへーん　常識ですよ」
小鳥たち
「おっほーん　常識ですよ」
ヤチブキの妖怪キラーラのうた
「キラッ　キララッ　キラキラーラ」
花たちと小鳥たちの合唱
「キラッ　キララッ　キラキラーラ」
朝露の妖怪ポロポロ
「（小柄な　水いろのしずくの扮装で　泣きながら）ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン（泣いて）

（七四）

レラちゃん　とっても　とっても　かわいそうで　ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　やっぱーり　あーらわれーたぞー　オホーイ　泣虫（なーきむーしー）　泣面（なーきつらっ）　泣上戸（なーきじょーごっ）　オホーイ
朝露（あさーつゆー）の妖怪（よーかーい）　ポーロポーロがー……」
レラ
「わたし　だいじょうぶよ　どんなに　おにいちゃんたちが　海がわの岸のひとをにくもうとしたって
わたし　けっして　くじけないわ」
朝露の妖怪ポロポロ
「ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン（泣いて）　あらそいの火をけそうとして　たったひとりで
がんばる　レラちゃん　やっぱり　かわいそう　ポロッ　ポロッ　なみだの朝露　ポロポローン」
レラ
「わたし　けっして　ひとりじゃあないわ　海がわの岸のペケレと　いつも　いっしょよ」
ペケレ
「ぼくだって　いつも　山がわの岸のレラと　いっしょだよ」
朝露の妖怪ポロポロ
「ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン（泣いて）　りょうほうの岸を　仲なおりさせようとして
勇気いっぱいがんばる　レラちゃん　ペケレくん　ああ　泣けてきちゃうよ　ポロッ　ポロッ　なみだ
の朝露　ポロポローン」
モモンガーの妖怪フワーテピュー
「（ブラウンの羽根をひろげ　ブラウンのしっぽをふって　スピーディにあらわれ）フワーテピュー

（七五）

ぼくはエゾモモンガーのフワーテピュー　この森が　一年じゅう　春だってことは　のんびり屋のぼく
だって　ちゃーんと知ってるさ　フワーテピュー（はしりまわって）フワーテピュー　フワーテピュー」
春のあかるい音楽と光　爆発
嘗の妖怪ハヒフヘホケッチョのうた
「ハーハケッチョ
森は
いちねんじゅう
春」
小鳥たちの合唱
「春　春　春　春」
モモンガーの妖怪フワーテピュー
「そいつは　あったりまえの　てんてこまーい（とびまわって）フワーテピュー　フワーテピュー」
小鳥たちの合唱
「夏も　春」
朝露の妖怪ポロポロ
「ジリジリ　テカテカ　ダックダクの　あの夏が　春だなんて（泣いて）ポロッ　ポロッ　なみだの朝露
ポロポローンと　泣けちゃうよ」
小鳥たちの合唱
「秋も　春」
レラ

（七六）

「もみじだって　落葉だって　こころのなかの春のいろを　しっかり　がまんづよく　もやしているんだわ」
小鳥たちの合唱
「冬も　春」
ペケレ
「でも　きっと　雪や氷のしたで　寒さにたえながら　こころのなかの春を　あかるく　たのしく
生きていくってとっても　たいへんなんだろうなあ」
小鳥たちの合唱
「森は
いちねんじゅう
春　春　春　春」
鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョのうた
「ヒーヒケッチョ
フーフケッチョ
ヘーヘケッチョ
ホーホケッチョ
ハヒフヘホケッチョ」
小鳥たちの合唱
「ケチョ　ケチョ　ケケッチョ」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「でも　この森で　いちねんじゅう　春のこころを　しっかり　もちこたえているのは　いったい　だぁれ？」

（七七）

沈黙
モモンガーの妖怪フワーテピュー
「（かんがえこみ）ぼくが　フワーテピュー　フワーテピューと　自由にとびまわれるのは　いったい
だれのおかげなんだろう」
朝露の妖怪ポロポロ
「ぼくが　ポロッポロッ　なみだの朝露　ポロポローン　って　おもいっきり　泣けるのは　ほんとうに
だれのおかげなんだ（泣く）」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「トドマツさんよ」
花たち（くちぐちに）
「エゾマツさんよ」
「シラカバさんよ」
「ハルニレさんよ」
「ナナカマドさんよ」
「ナラの木さんよ」
小鳥たちの合唱
「森じゅうの
木のおかげよ」
花たちの合唱
「森じゅうの

（七八）

いっぽんずつの
とおとい
木のおかげよ」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「（ヤチブキの花をかざし）森をつくり　春のこころを　そだてている　いっぽんずつの木に　感謝の花を
ささげましょう　ありがとう　ということばといっしょに　いちねんじゅうの春の花を　この劇場の
森いっぱいのいっぽんずつの　春のこころをもった木に　ささげましょう」
ペケレ
「えっ　どこに　木が？」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「観客席の　みなさんたちが　ひとりのこらず　ふるさとの森をつくる　いっぽんずつの木なのです」
小鳥たちや花たちなど全員
「（手に手に花をもち）ふるさとの森をつくる　木さん　ほんとうにありがとう」
陽気な音楽と光
全員　手に手に　花をもち　「木さん　ありがとう」と　くちぐちにさけびつつ　観客席におり　花を
てわたしそのまま　退場
ペケレ
「でも　ぼく　もっともっと　森のこころの奥をみたいなぁ　たのしいことや　うれしいときばかり
じゃあなくきっと　たいへんな苦労や　せつないおもいをのりこえて　春のこころを　まもりそだて
ている　そのありのままのすがたを　この目で　しっかり　みたいなぁ」

（七九）

レラ
「わたしもよ　つらい夏や　くるしい冬を　どうやって　春のこころですごすのかを　ちゃんとみて
みたいわ」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　よーくぞ　言ってぇ　くれまーしたー　オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ
ペケーレーくーんさぁ　はいってー　いこー　もっと　もっと　奥の　森の　ここーろへ　オホーイ
オホーイ」
三人　あゆみだし
溶暗
沈黙

6

暗闇
猛暑の声
「（威嚇して　劇場いっぱいに　ひびきわたるエコーで）ワッハッハッハッハ　もえろ　髪の毛　もえあがれ
目の玉　ワッハッハッハッハ　夏の　かんかん照りの　火の海に　しずめ　小鳥　ほろびろ　蝶々　ワッハッ
ハッハッハ」
声の途中から　猛暑の赤い光はげしく旋回
やがて

耳をつんざく金属音
いっそうはげしい猛暑の光
ペケレ
「（汗だくになり　よたよたとへたりこみ）あっついよぉ　眉毛が　チリチリ　やけるよぉ」
レラ
「（りょう手で目をおおい）まぶしくって　もうなんにもみえないわ（しゃがみこむ）」
猛暑の声
「ワッハッハッハ　もえろ　ツメクサ　もえあがれ　ドングリ　ワッハッハッハ　夏の　むごい日照りで
とけろ　緑　死ね　森のいのち　ワッハッハッハッハ」
ペケレ
「（地にへたばり）ぼく　ほんとうに　死にそうだ」
レラ
「（地にへたばって　ペケレの手をにぎり）もう　からだが　もえつきそうよ」
みどりの音楽と光
木の葉の妖怪ハッパッパたち　ぜんしん緑いろのすがた　緑いろの木の葉のかたちのマントをすっぽりかぶり
それをりょう手で傘のようにひろげてあらわれる
木の葉の妖怪ハッパッパたちの合唱
「（おどりつつ）
わたしたちは
この森の

（八一）

木の葉の妖怪ハッパッパ
どんなにあつい
夏の陽ざしをも
ぜったい
森の
みずみずしいいのちに
かえようと
いっしょうけんめいな
わたしたちは
木の葉の妖怪ハッパッパ」
うたい踊りながら　木の葉の妖怪ハッパッパたち
傘のようにひらいたマントのかげに　ペケレとレラをかくまう
ペケレ
「（マントの下から）ありがとう　ハッパッパさんたち　やっと　木蔭のように　すずしくなった」
レラ
「（マントの蔭から）ありがとう　やっと目をあけられるわ　でも　わたしたちのかわりに　ハッパッパさん
あなたたちが　暑さやまぶしさに　ぜんしんをさらしてくれているのね」
木の葉の妖怪ハッパッパたちのうた
「わたしたちは
この森の

（八二）

木の葉の妖怪ハッパッパ
どんなまぶしい
夏の陽ざしをも
ぜったい
春の
ういういしいいのちに
かえようと
いっしょうけんめいな
わたしたちは
木の葉の妖怪ハッパッパ」
猛暑の赤い光　空をおおい
耳をつんざく金属音といっしょに
森がもえあがる
レラ
「（にげまどい）火事だわ」
ペケレ
「（にげまどい）森が火につつまれていく」
木の葉の妖怪ハッパッパ1
「（さけんで）夏の火　あっちに　いっちまえ！」
木の葉の妖怪たち

（八三）

「（さけんで）いっちまえ」
木の葉の妖怪ハッパッパたち2
「（さけんで）つめたい雨　降ってこい！」
木の葉の妖怪ハッパッパたち
「（さけんで）降ってこい！」
パッと　猛暑の赤い光と金属音やむ
大雨の声
「（威嚇して　劇場いっぱいに　エコーで）イッヒッヒッヒッヒッヒ　とけろ　耳たぶ　ながれろ
ほっぺた　イッヒッヒッヒッヒ　秋の　ザンザカ雨の　大洪水に　さらわれろ　シマリス
しずめ　オコジョ　イッヒッヒッヒ」
声の途中から　稲妻と大雨の青い光はげしく旋回
やがて
耳をつんざく激流の音
ペケレ
「わぁ　びしょぬれだぁ」
レラ
「洪水に　ながされちゃう」
木の葉の妖怪ハッパッパたち
「（ながされながら）さようならぁ　レラちゃん　さようならぁ　ペケレくん（ちりぢりにきえていく）」
大雨の声

（八四）

「イッヒッヒッヒッヒッヒ　おちろ　葉っぱ　ふりしきれ　シラカバ　イッヒッヒッヒ　秋の　つめたい雨で
きえろ　緑　死ね　森のいのち　イッヒッヒッヒッヒ」
ペケレ
「（ながされながら）アップップゥ　おぼれちゃうよぉ」
レラ
「（必死に　なにかにしがみつこうとして）どこまでも　ながされていくわ」
あかるい音楽と光
木の根の妖怪ネッコッコたち　ぜんしん土いろのすがた　土いろの大きな壷をもって　あらわれる
木の根の妖怪ネッコッコたちの合唱
「（おどりつつ）
ぼくたちは
この森の
木の根の妖怪ネッコッコ
どんなにながい
秋の大雨をも
ぜったい
森の
わかわかしいいのちに
かえようと
いっしょうけんめいな

ぼくたちは
木の根の妖怪ネッコッコ」
うたい踊りながら　木の根の妖怪ネッコッコたち
大きな壷に　雨水をすくってはいれる
ペケレ
「（やっとたちなおり）ありがとう　ネッコッコさんたち　おかげで　やっと　水がひいた」
レラ
「（やっとおちついて）ありがとう　いのちびろいしたわ」
木の根の妖怪ネッコッコたちのうた
「ぼくたちは
この森の
木の根の妖怪ネッコッコ
どんなつめたい
秋の長雨をも
ぜったい
春の
うつくしいいのちに
かえようと
いっしょうけんめいな
わたしたちは

木の根の妖怪ネッコッコ」
風吹きはじめる
冬の光
シマリスの妖怪チョロッチ
「（ふさふさの毛につつまれてあらわれ）雪だ　氷だ　地吹雪だ（手にもった篭に　ドングリの実を
入れながら）チョロッチ　チョロッチ　冬のそなえに　精だそう　チョロッチ　チョロッチ」
レラ
「（手をこすり）風が　つめたくなってきたわ」
ペケレ
「（ふるえながら）からだじゅうの　血がこおりそうだ」
木の根の妖怪ネッコッコ1
「さようなら　レラちゃん　また来年」
レラ
「あっ　木の根の妖怪ネッコッコさん　どこへ？」
木の根の妖怪ネッコッコ2
「さようなら　ペケレくん　ぼくたち　森の　土の下で　一年じゅう　この壷にためた水で　春のいのちを
やしなうのです」
風いっそうつよく吹く
冬の光いっそうはげしくめぐる
ヒグマの妖怪ワォーレ

（八七）

「（ふさふさの毛につつまれてあらわれ）ワォーレ　ワォーレ　寒さだ　しばれだ　冬ごもりだ（クリの
実をひろってたべながら）ワォーレ　ワォーレ　たらふくたべたら　穴のなかで　ぐーすか　ぐーすか
冬ごもりだ森のふところのなかで　とろーり　とろーり　冬ごもりだ　ワォーレ　ワォーレ」
雪ふりはじめる
木の根の妖怪ネッコッコたち
「雪だ　氷だ　地吹雪だ　ネッコッコ（去る）」
シマリスの妖怪チョロッチ
「寒さだ　しばれだ　銀世界だ　チョロッチ　チョロッチ（去る）」
ヒグマの妖怪ワォーレ
「つららだ　樹氷だ　ダイヤモンド・ダストだ　ワォーレ　ワォーレ（去る）」
風　はげしく吹き荒れる
吹雪の光めぐる
猛吹雪の声
「（威嚇して　劇場いっぱいに　エコーで）ウッフッフッフッフ　ひえろ　くちびる　かじかめ　手の指
こおれ　心臓　ウッフッフッフ　冬の　ぎんぎん寒さの　氷の牢屋に　とじこめろ　タヌキ　息とめろ
キツネ　ウッフッフッフッフ」
ペケレ
「（がたがたふるえ）わぁ　手足が　氷になっていく」
レラ
「（こおって）もう　うごけないわ」

（八八）

猛吹雪ふきつのる
猛吹雪の声
「ウッフッフッフッフ　しばれろ　泉　さけろ　ヤチダモ　ウッフッフッフ　冬の　きびしい寒さで
こおれ　緑　死ね　森のいのち　ウッフッフッフッフ」
オオカミの妖怪ホホーレ
「(灰いろの　やせおとろえたすがたであらわれ)ホホーレ　ホホーレ　腹すいたぁ　死にそうだぁ
(レラにつかづき　においをかぎ)ホホーレ　ホホーレ　いい匂いだ　うまそうだ」
ペケレ
「(こごえながら　必死に)オオカミの妖怪ホホーレさん　たべるなら　ぼくにして」
オオカミの妖怪ホホーレ
「(ペケレのほうをむき)どうしてだ　ホホーレ　ホホーレ」
ペケレ
「(必死に)ぼくをたべて　そのかわり　レラをたすけて」
オオカミの妖怪ホホーレ
「(ペケレのほうにちかづき　においをかぎ)ホホーレ　ホホーレ　じゃあ　わるいけど　おまえさん
からいただくとしようか(襲いかかろうとする)」
シカの妖怪デモーネ
「(よろけながらあらわれ)待って　オオカミの妖怪ホホーレさん」
オオカミの妖怪ホホーレ
「なんだ　シカの妖怪デモーネ婆さんか」

シカの妖怪デモーネ

「デモーネ　ホホーレさん　肉しかたべられず　冬ごもりのできない　ほんとうに　不器用なあなたデモーネ　ホホーレさん　やっぱり　あなたも　森の家族の一員　だれかをたべて　生きていかなければならないのは　よくわかるわ　デモーネ　ホホーレさん　レラちゃんとペケレくんは　この森の　たいせつなお客さま　けっして　たべちゃあいけません　デモーネ　ホホーレさん　あなたも　おなかがすいて　かわいそう　どうぞ　わたしをたべてくださいな　わたしはおばあさんだけれど　デモーネホホーレさん　きっとおいしいと思いますよ」

オオカミの妖怪ホホーレ

「(泣いて)ホホーレ　ホホーレ　ありがとう　シカの妖怪デモーネ婆さん　なんてやさしいんだ　なんてりっぱなんだ　なんていっしょうけんめいなんだ(頭をかきむしり)ホホーレ　ホホーレ　それにくらべ　おれは　なんてあさましいんだ　なんて意地きたないんだ　なんてどん欲なんだ　(泣いて)ホホーレ　ホホーレ　ああ　はずかしい　ああ　消えてしまいたい　(シカの妖怪デモーネに　ひざまづいてあやまり)　ゆるしてください　デモーネ婆さん　ホホーレ　ホホーレ　ああ　いっそ　なにもたべず　飢えて死のお　ホホーレ　ホホーレ(泣き伏す)」

ペケレ(エコーで)

「(必死に)ホホーレさん　ぼくをたべて!」

シカの妖怪デモーネ(エコーで)

「(必死に)デモーネ　ホホーレさん　わたしをたべて!」

オオカミの妖怪ホホーレ(エコーで)

「(大声で泣き)ああああ　ホホーレ　ホホーレ」

三人の声ハーモニーして木霊
溶暗
レラの声（エコーで）
「ああ　わたし　どうすればいいの？……」
四人の声の木霊　とけあって
いつしか　ヤマビイコの声にかわる
ヤマビイコの声（エコーで）
「（はじめは威嚇的に）エッヘッヘッヘッヘ（あかるく）オッホッホッホッホ（もとの声にもどり）
オホーイ　あーりがとー　レーラーちゃーん　あーりがとー　ペケーレーくーん　じぶーんを
犠牲（ぎせーい）にしてー　他（たにーん）を助（たすー）けよーうとする　ここーろこそ　このー　森（もりー）の　一年（いちねーん）じゅーの　春（はるー）の
ここーろ　なのさー　オホーイ　オホーイ」
レラの声
「あっ　ヤマビイコさん……」
ペケレの声
「じゃあ　いままでの　あの声は……」
ヤマビイコの声（エコーで）
「（はじめ威嚇的に　すぐ明るい声で）ワッハッハッハッハ　オホーイ　オホーイ　すべーては　夢（ゆめー）の
またー　夢（ゆめー）」
レラ
「じゃあ　一年じゅうの　春の森も……」

ペケレ
「夢にすぎないの？」
パッと
春のあかるい音楽と光　爆発
色とりどりの花たちの合唱
「（おどりながら）
春
春
じぶんをすてて
だれかをいかせば
森は
いつも　春」
色とりどりの小鳥たちの合唱
「（おどりながら）
春
春
おたがいさまと
たすけあっていけば
森は
いつも　春」

鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョのうた
「ハーハケッチョ
森は
いちねんじゅうの
春」
小鳥たちの合唱
「ヒーヒケッチョ」
花たちの合唱
「フーフケッチョ」
ヤチブキの妖怪キラーラのうた
「ヘーヘケッチョ」
朝露の妖怪ポロポロのうた
「(泣きながら)
ホーホケッチョ」
モモンガーの妖怪フワーテピューのうた
「ハヒフヘホケッチョ」
全員の合唱
「ケチョ　ケチョ　ケケッチョ
ケチョ　ケチョ　ケケッチョ
ケチョ　ケチョ　ケケッチョ

(九三)

ペケレ
「どんな　つらいことだって　春のこころを　まもりそだてていくための　とってもたいせつな　試練なんだねぇ」
レラ
「わたしたち　いつだって　いちねんじゅう春の森を　こころに　しっかり　おいしげらせていなくちゃあ　ならないんだわ」
ペケレ
「ぼくたち　やっぱり　川の岸にもどろう」
レラ
「そして　海がわの岸のひとびとと　山がわの岸のひとびとが　いっしょに　なかよく　たすけあってくらすことができるように　いっしょうけんめい　はたらきましょう」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　ペケーレーくん　ずっとー　このー　森（もりー）で　くらーしてもー　いーんだよー　オホーイ　オホーイ」
レラ
「（ペケレと手をつなぎ）ありがとう　ヤマビイコさん　でも　わたしたち　川の岸にかえるわ」
ペケレ
「（いっしょにあゆみだし）さいしょの鮭が　川をのぼってくる　バチャバチャという音が　ほらきこえてくるでしょう　ぼくたち　はやく行って　あらそいをとめなくちゃあならないのです」
朝露の妖怪ポロポロ

「ポロッポロッ　なみだの朝露　ポロポローン（泣いて）がんばってね　レラちゃん　しっかり
やってね　ペケレくん　ポロッポロッ　なみだの朝露　ポロポローン」
レラとペケレ
「さよーならー　いちねんじゅう春のこころをもった　森のみなさーん　さよーならー」
森の全員
「さよーならー」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　ペケーレーくーん　なにーか　こまったらー　いーつ
でーも　森（もりー）に　もどってー　おーいでー　オホーイ　オホーイ」
森の全員
「もどっておいで」
ヤマビイコの声（エコーで）
「オホーイ　オホーイ　オホーイ（だんだんちいさく）ついには消える」
溶暗
沈黙

7

暗闇
鮭のばちゃばちゃはねる音

エコーでひぎきわたる
沈黙
海がわの岸の男たちと女たちの声
「（口々に）鮭の　川をのぼりはじめる　音が　きこえだしたぞー」
破壊的な音響
光の血まみれな狂乱
海がわの岸の男たち　手に手に長い柄の銛をもって乱入し狂舞
海がわの岸の女たち　鮭の頭を叩く短い棒をもって乱入し狂舞
破壊的な音楽にあわせて
海がわの岸の男たちの合唱
「この川は」
海がわの岸の女たちの合唱
「わたしたちの川」
ペケレの父のうた
「雄の鮭も」
ペケレの母のうた
「雌の鮭も」
ペケレの伯父のうた
「みんな」
ペケレの伯母のうた

「海がわの　こっちの岸の」
海がわの岸の男たちの合唱
「おれたちのもの」
海がわの岸の女たちの合唱
「わたしたちのもの」
ペケレの叔父のうた
「けっして　けっして」
ペケレの叔母のうた
「山がわの　むこう岸の」
海がわの岸の男たちの合唱
「やつらのものじゃあ」
海がわの岸の女たちの合唱
「ないわ」
音楽切断
光平静
ペケレ
「（父にとりすがり）でも　おとうさん　やっぱり　この川も　そして　はるかな北の海から　このふるさとの川にかえってくる　あの銀の笛のように光る鮭だって　きっと　みんなのものです　海がわの岸と山がわの岸にくらす　みんなのものです」
ペケレの父

「（ふりはらい）こっちの岸のものだけが　そう思ったって　むこう岸のものが　そう思わなかったら
いったいぜんたい　こっちの岸のものは　どうなる」

ペケレの母

「ペケレ　おまえもふくめて　海がわの岸のものは　みんな　冬のたべものをたくわえることができずに
飢え死にしてしまうのよ」

ペケレ

「（母の手をとって必死に）それは　ちがいます　おかあさん　むこう岸にだって　ぼくとおんなじ考えの
ひとがちゃんといて　わずかの鮭でも　わかちあおうとしているのです」

ペケレの従兄

「それは　だれだ？」

ペケレ

「レラです　ぼくといっしょに　ヤマビイコの案内で　いちねんじゅう春の森をたずね　どんなつらいこ
とがあってもなかよく　たすけあっていきる知恵を　しっかりと　まなんできたのです」

ペケレの従姉

「えっ　むこう岸の女の子といっしょに？」

ペケレ

「ぼくらには　もう　むこう岸もこっちの岸もないのです　ぼくらは　ほんとうに　おなじ一つの川をささえもつ
おなじ一つの手のひらなのです」

ペケレの従弟

「（怒って）ペケレ　おまえ　むこう岸の女の子といちゃついたりしゃあがって！」

ペケレの従妹
「(怒って) ペケレ　あんた　わたしたちをうらぎったのね　むこう岸の女の子にたぶらかされて　スパイにされちゃったのね」
ペケレ
「(怒って　従弟と従妹にとびかかろうとし　はっとして拳をひっこめ) ああ　ゆるして　レラ　つい　かっとなってぼくまでが拳を　憎しみの岩のようにかため　悪魔のささやきにのって　あやうく　暴力をふるうところだった」
とおくからの男たちの声
「(口々に) 鮭の　尾やひれで　川の水をうつ音がする　だが　変だなぁ　音ばかりで　さっぱり　魚の姿が　みえない」
とおくからの女たちの声
「(口々に) きっと　むこう岸のやつらが　また　なにか　卑怯なやりくちで　鮭を　一匹のこらず　とりつくしたのよ」
ペケレの父
「(銛をふりあげ) さぁ　いこう　かずすくない　鮭を　むこう岸のやつらにわたさないために　さぁ　いこう」
海がわの岸の男たち
「(銛をふりあげ) さぁ　いこう」
ペケレの母
「(鮭を叩く棒をふりあげ) さぁ　いきましょう　わずかしかのぼってこない鮭を　ぜんぶこっちの岸のものにするために　さぁ　いきましょう」
海がわの岸の女たち

(九九)

「（鮭を叩く棒をふりあげ）さぁ　いきましょう」
破壊的な音楽
光の　血まみれの狂乱
海がわの岸の男たちと女たちの行進
ペケレの伯父
「邪魔だてする　むこう岸のやつらの　心臓には　この銛を　うちこもう」
海がわの岸の男たち
「うちこもう」
ペケレの伯母
「わたしたちの鮭を　よこどりしようとするやつらの　脳天を　この棒で　うちくだこう」
海がわの岸の女たち
「うちくだこう」
ペケレ
「（追いすがり）待って　ぼくもいく」
ペケレの叔父
「（嘲って）ふん　銛のかわりに　クマザサの葉っぱなんぞ　もちやがって！」
ペケレの叔母
「鮭をとるのでなけれぁ　足手まといだから　こなくたっていいよ」
ペケレ
「（必死に）りょう岸のみんなが　力をあわせてとり　仲よくわけあおうって言うために　ぼくは　行く」

ペケレの従兄
「黙れ！　くちばしの黄色いヒバリめ！　口先三寸　ぺらぺらさえずりやがって……」
ペケレの従姉
「そのじつ　むこう岸の女の子と　いちゃつきたいだけなのよ」
ペケレ
「（必死に）ぼくとレラは　約束したんだ　りょう岸のひとびとが　もう　けっして　あらそったりしなくなるようにいっしょうけんめい　はたらこーって　みんなが　すこしずつ　じぶんを犠牲にして他人をいかすことができるように　しっかり　がんばろーって……」
ペケレの従弟
「（ペケレをつきとばし）へん　ずっとむかしからの　かたきの村のものとの約束なんぞ　信ずるものか」
ペケレの従妹
「（ペケレをつきとばし）わたしたちのとった鮭は　あんたになど　ひと切れだってたべさせちゃあ　あげないわ」
ペケレの母
「（ペケレをかばい）ペケレ　みんなのいうとおりだよ　頭を川の水でひやし　夢からさめたほうがいいよ」
さらに破壊的な音楽
光の　さらに血まみれの狂乱
海がわの岸の男たち
「（銛をふりかざし）さぁ　行こう　行って　のぼってくる鮭を　ぜんぶ　こっちの岸のものにしよう

（一〇一）

（去る）」
海がわの岸の女たち
「（叩き棒をふりかざし）さぁ　行きましょう　行って　きびしい冬をこすための　たいせつなたべものをしっかり　手に入れましょう（去る）」
ペケレ
「（必死にみんなの後を追い　泣きながら）ねぇ　みんな　どうして　わかろうとはしないんだ　たとえ一匹の鮭しかとれなくたって　わかちあいのこころがあれば　たった一匹の鮭で　りょう岸のみんなが飢えをみたすことができるということを　ねぁ　みんな　どうして　わかろうとはしないんだ（去る）」
溶暗
沈黙

8

暗黒の世界
ピェーッという縄文笛　ドドドドッと　縄文太鼓の音
光の血まみれの狂乱
（以下　スローモーションで）
山がわの岸のひとびと　レラの兄を先頭に
銛と短棒をもって　川の浅瀬にはいり
血まなこで　鮭をさがしまわる

そこに　海がわの岸のひとびと　ペケレの父を先頭に　銛と短棒をもって乱入
音楽と光にあわせ
たがいに　銛を突きあい　棒でなぐりあう　海がわの岸のひとびとのうしろで　けんめいにさけぶペケレ
ペケレ
「やめて！　おとうさん　やめて！　おじちゃん　鮭を突く銛で　人を突くのは　やめて！」
山がわの岸のひとびとのうしろで　けんめいにさけぶレラ
レラ
「やめて！　おにいちゃん　鮭の頭をうつ棒で　人の頭をうつのは　やめて！　おばちゃん」
わきおこるかん声
入りまじる悲鳴
レラの兄を先頭に　山がわの岸のひとびと　しだいに　海がわの岸のひとびとを圧倒し
海がわの岸のひとびと　じりじり後退し　山がわの岸のひとびと　海がわの岸に殺到する
レラの兄
「（銛をふりあげ）さぁ　海がわの岸のやつらを　川から追いだしたぞ」
山がわの岸のひとびと
「（銛と棒をふりあげ）追いだしたぞ」
レラの兄
「このうえは　海がわの岸の村に火をはなち　みなごろしにしてしまえ！」
山がわの岸のひとびと
「みなごろしにしてしまえ」

（一〇三）

レラ
「（兄にすがって）人をころすものは　かならず　人にころされる　おにいさん　やめて！」
音楽と光　停止
ひとびと凍る
レラの兄
「（スポットの中で）おや　ペケレ　いいところで　であったな」
ペケレ
「（スポットの中で）あ　レラのおにいさん」
レラの兄
「なれなれしい小僧め　だが　その図々しさも　きょうかぎりにしてやるわ」
レラ
「（スポットの中で）おにいちゃん！」
レラの兄
「さぁ　男の約束　海がわの岸のやつらをみなごろしにする　一番手として　ペケレ　まず
おまえのいのちからいただくとしようか」
レラ
「（スポットの中で　さらにはげしく）おにいちゃん！」
レラの兄
「（銛をふりあげ）かわいい妹のレラをたぶらかした　憎っくいやつめ　おれの　稲妻よりも
おそろしい　銛の一撃をその脳天に　さぁ　うけてみろ（うちおろす）」

ペケレ
「（あやうく　かわし）ぼく　ぜったいに　レラのおにいさんとは　あらそわない」
レラの兄
「（さらに　銛をうちおろし）だまれ　卑怯者め！」
ペケレ
「（かわしながら　にげて）武器をもつものは　いつか　きっと　武器によって　ほろびる　ぼくは
ぜったいにこの　クマザサの葉っぱしか　もたない」
レラの兄
「畜生！　リスのようにすばしこい奴め　（ふりおろす）」
レラ
「おにいちゃん！」
レラの兄
「（さらに　銛をふりおろし　ふりおろし）畜生！　影のように　にげ足のはやいやつめ」
ペケレ
「（かわしながら　にげて）にげているんじゃあない　暴力という　悪魔のさそいから　平和という
神のせかいへと　むかっているだけのことなんだ」
レラの兄とペケレ　追いつつ　にげつつ　去る
レラ
「（ひとり　スポットの中にのこり　泣いて）ペケレ！　おにいちゃん！」
レラ　スポットと共に消える

（一〇五）

暗黒
不安の音楽
反対がわからあらわれるペケレとレラの兄（それぞれスポットの中で　スローモーションで）
レラの兄
「（へとへとになりながら　ペケレを追って　銛をふりおろし）（よろめいて）畜生！　ペケレのやつめ
勝手しった海岸の岩場に　にげこみやがったな」
ペケレ
「（ぴょんと　岩から岩に　とびうつり　腕組みして　レラの兄をみ）いま　あなたのたっている岩と
ぼくのたっている岩のあいだは　切りたった割れ目になっていて　ほら　ごらんなさい
はるか下には　海が　どすぐろい口をあけて　おちてくるものを　のみこもうとしています」
レラの兄
「（岩と岩のあいだをのぞきこみ）ふん　ずいぶんとふかい割れ目だ　底のほうでは　死神が　舌なめず
りしている畜生！　ペケレのやつ　不慣れなおれには　とびこせないと思って　ゆうゆうとしていやがる」
ペケレ
「雲のように　身のかるいぼくだって　いのちがけで　とんだのです」
レラの兄
「なんの　これしきの割れ目　おまえにとべて　おれにとべないわけがない」
ペケレ
「レラとあなたが　血をわけあった兄と妹なら　レラとこころをひとつにしているぼくとあなたは　ここ
ろのかよいあう兄と弟　どうか　おねがいですから　そのおそろしい銛をすてて　ぼくのはなしを　きい

てください」

レラの兄

「へりくつは　風景をかくす霧のように　うそうそしていて　きらいだ」

ペケレ

「あの川は　だれのものですか」

レラの兄

「きまっているじゃあないか　山がわの岸の　おれたちのものだ」

ペケレ

「川をのぼってくる鮭は？」

レラの兄

「ぜんぶ　おれたちのものだ」

ペケレ

「じゃあ　海は？」

レラの兄

「……」

ペケレ

「空は？　太陽は？　風は？」

レラの兄

「（銛をふりあげ　いきりたち）だまれ　口先三寸の　へなちょこ野郎！　おれがこんな割れ目ぐらい
とびこせないとおもって　からかっていやがる　よーし　とびこして　おまえの心臓に　この銛を

（一〇七）

くざっと　うちこんでやるわ」
ペケレ
「（絶叫して）おにいさん　あぶない！」
レラの兄　とびこえようとし　足をふみはずし　絶叫とともに　消えていく
レラの兄の絶叫　エコーで空いっぱいに反響し
やがて　沈黙
暗転

9

暗黒
レラの弟の声
「（泣いて）おにいちゃんが　死んだ　レラおねえちゃん」
レラの声
「えっ　おにいちゃんが！」
レラの従弟の声
「（泣いて）死んだんじゃあなく　ころされたんだ」
レラの声
「だれに？」
レラの伯母の声

「かわいい姪のレラよ　ペケレにころされたんだ　おまえと仲よしの　むこう岸のペケレに
崖からつきおとされたんだ」
レラの声
「（絶叫し）ペケレ！」
レラの伯父の声
「（いきりたち）ペケレをころそう！　いとしい姪のレラの兄をころしたペケレに　復讐しよう」
レラの声
「（絶叫し）ペケレ！（かけだす）」
レラの弟の声
「あっ　風のようにかけだして　レラおねえちゃん　どこにいくの？」
レラの従妹の声
「まっさおな顔で　狂ったようにかけだして　従妹のレラ　だれをさがして　森にはいっていくの？」
破壊的な音楽
光の血まみれの狂乱
レラの伯母
「（長棒をふりかざし）レラの兄をころしたペケレを　さがしだそう」
山がわの岸の女たち
「（長棒をふりかざし）さがしだそう」
レラの伯父
「（弓矢をふりかざし）ペケレのからだじゅうに　毒をたっぷり塗った矢をうちこんで　息の根をとめよう」

（一〇九）

山がわの岸の男たち
「（弓矢をふりかざし）息の根をとめよう」
山がわの岸のひとびと
いっせいに　気勢をあげながらすすむ
ピェーッという縄文笛の音
山がわの岸の男たち
「（弓矢をふりあげ）ころせ　ころせ　ペケレを　ころせ」
ドドドドッと　縄文太鼓の音
山がわの岸の女たち
「（長棒をふりあげ）ころせ　ころせ　ペケレを　ころせ」
溶暗
沈黙
暗黙
ペケレ
「（スポットの中で）（頭をかきむしってくるしみ）ああ　ぼくが　あの　海べの岩場に　にげこみさえしなかったら　レラのおにいさんも　足をふみはずして　死ぬことは　なかったんだ　ああ」
レラのおじいちゃん
「（スポットの中で）ペケレ」
ペケレ
「あっ　レラのおじいちゃん」

（一一〇）

レラのおじいちゃん
「このあいだは　たすけてくれて　ありがとう」
ペケレ
「(泣きそうになって) おじいちゃん　ぼく……」
レラのおじいちゃん
「レラのおにいちゃんのことか」
ペケレ
「ええ　岩場から足をふみはずして　おにいさんが……」
レラのおじいちゃん
「ペケレ　わしは　おまえを信じている　じゃが　山がわの岸の連中は　おまえをころそうとして
血まなこになっている　はやく　森のおくに　にげこむがいい」
ペケレ
「森のおく?」
レラのおじいちゃん
「きっと　レラが　待っているじゃろう」
ペケレ
「ありがとう　おじいちゃん」
ペケレ　スポットとともに消える
レラのおじいちゃん
「空の太陽が氷のように冷え　ときならぬ霜が大地をいたぶり　野山からアカシカやフレップの実が

(一一一)

すがたをけし鮭が川にのぼらなくなったのも　もとはといえば　海がわの岸のものと　山がわの岸のものが　みにくくいがみあい　あさましくつかみあって　神さまのいかりをかったのが原因　ああいつになったら　りょう岸のものたちがそれに気づいて　レラとペケレのように　仲よく　たすけあってくらすように　なるのじゃろう」

レラのおじいちゃん　スポットとともに去る

暗転

破壊的な音楽

光の血まみれの狂乱

ペケレの母

「（半狂乱になり　泣きわめいて）たいへんだわ　ペケレがころされる　わたしの　たった一人の息子のペケレがむこう岸のやつらに　ころされる」

ペケレの伯父

「ペケレは　わしにとっても　たいせつな甥っこだけれど　よりによって　むこう岸の森に　にげこんでしまってはなぁ……」

ペケレの母

「（泣いて）ああ　ペケレ　かわいそうな　わたしの息子　うまれ育った岸べのものからも　みすてられひとりぼっちで　なぶり殺しにされてしまう……」

ペケレの伯母

「だから　甥っこのペケレには　あれほど　むこう岸にはちかづくなって　いったのに……」

ペケレの従兄

「だから　いとこのペケレには　あれほど　かたきのやつらの女の子と　いちゃつくなと　警告したんだ」

ペケレの父

「（決然と）わかった　ずっとむかしから　憎い敵であった　むこう岸のやつらと　よしみをつうずるなど　ほんらいは火あぶりにされてもしかたないペケレだけれど　しかし　わしにとっては　たった一人のかわいい息子たとえ　ペケレを助けにいって　やつらにとらえられ　どんな目にあおうとわし一人で　むこう岸にわたり　ペケレを助けだそう」

ペケレの母

「（泣いて　ペケレの父にとりすがり）わたしも　いっしょに　いくわ」

ペケレの父

「（おしとどめ）いや　勝手しらぬむこう岸　どんなはかりごとの落し穴が　待ち伏せしているかもしれん　わしひとりでいこう」

ペケレの母

「（はげしく泣いてとりすがり）かわいい息子のペケレのためなら　どんな落し穴にはまって　死んだって　いいわ」

ペケレの父

「（ふりはらい）だめだ　死ぬのは　わしひとりでいい」

ペケレの従姉

「（泣いて）わたしたちのいましめを破ったペケレだけれど　やっぱり　おなじ一族の血の糸でつながったいとこ同志みすててはおけないわ」

（一一三）

ペケレの従弟
「死の渕に追いやられようとしているいとこのペケレをみすてるということは　血のつながったじぶんをみすてるということ……」
ペケレの従妹
「（棒をとりあげ）わたし　いとこのペケレを　たすけにいくわ」
ペケレの従兄
「（弓矢をとりあげ）はなたれ小僧のころから　ずっと　いっしょにくらしてきたペケレだ　やっぱり　みごろしにはできん」
ペケレの伯母
「（棒をとりあげ）いつも　夢のくにをさまよっている　かわった甥っこだけれど　山がわの岸のやつらになぶり殺しにされるのを　だまってみているわけにはいかないわ」
ペケレの伯父
「（弓矢をふりあげ）いこう　みんなで　ペケレをたすけだしに　いこう」
ペケレの母
「（みんなにとりすがり　泣いて）ありがとう　同族のかたがた　このご恩は　死んでも　わすれないわ」
ペケレの父
「（みんなに頭をさげ）ありがとう　同族のかたがた」
ペケレの伯父
「（弓矢をふりかざしてあるきだし）さぁ　ペケレをたすけにいこう」
ペケレの伯母

（一一四）

「（棒をふりあげてあるきだし）川をわたり」
海がわの岸の女たち
「（棒をふりあげてあるきだし）むこう岸へと」
ペケレの従兄
「（弓矢をふりあげてあるきだし）ペケレのいのちをすくいに」
海がわの岸の男たち
「（弓矢をふりあげてあるきだし）さぁ　いこう」
溶暗
沈黙

10

暗黒
縄文琴のしらべ
レラ　スポットの中にうかびあがる
レラのうた
「ペケレ
わたしの光
くらやみがふかいほど
あかるくもえて

（一一五）

わたしの足もとを照らしてくれる
ペケレ
わたしの光
こちらの岸と
むこう岸とをつなぐ
ペケレ
わたしの光」
縄文琴のしらべやむ
おもい悩む光
レラ
「（おもいあまって　泣きながら）ペケレ　どこにいるの　いますぐ　わたしのまえに　すがたをあらわし
なにもかもすっかり　はなしてちょうだい」
ヤマビイコの声
「（エコーで）オホーイ」
レラ
「（気をとりなおし）ふるさとの森の　ヤマビイコだわ（泣いて）こんにちわ　ヤマビイコさん（透明なヤマ
ビイコと握手）」
ヤマビイコの声
「オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　こんにちーわー」
レラ

（一一六）

「（泣いて）ねぇ　ヤマビイコさん　わたし　いったい　どうしたらいいの？」
ヤマビイコの声
「（エコーで）オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　きょーも　わたーしの　すがーた　はっきーり
みえーまーすかー　オホーイ」
レラ
「（気をとりなおし）ええ　髪の毛のいっぽんずつまで　はっきりと……」
ヤマビイコの声
「（エコーで）じゃー　すっかーり　だーいじょーぶ　レーラーちゃーん　オホーイ」
レラ
「（泣いて）でも　ペケレが……」
ヤマビイコの声
「（エコーで）オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　ペケーレーくーんは　いーま　このー　森（もりー）にー
むかってー光（ひかーり）のよーにー　すばーやくー　はしーってー　いまーすーよー　オホーイ　オホーイ」
レラ
「（泣いて）ありがとう　ヤマビイコさん（心配そうに）でも　無事に　追手からのがれて　わたしの
もとにたどりつけるかしら（さらに　おもい悩み）そして　ああ　ペケレは　わたしのおにいちゃんのこと
なんと言うのかしら（泣く）」
縄文琴のしらべ
レラのうた
「ペケレ

（一一七）

わたしの光
くるしみでいっぱいの
いくさのやみが
わたしたちのくらしからきえるよう
ペケレ
わたしの光
ふたつの岸を
へいわの糸でつなぐ
ペケレ
わたしの光」
縄文琴のしらべ
やがてやみ
暗転
ピェーッという縄文笛の音
山がわの岸の男たちの声
「ころせ　ころせ　ペケレを　ころせ」
山がわの岸の女たちの声
「ころせ　ころせ　ペケレを　ころせ」
ドドドドッと　縄文太鼓の音
レラの伯父の声

「ペケレのやつ　レラを追って　森にむかったにちがいない」
レラの弟の声
「ぼく　森への近道　しってるよ　いつか　レラねえちゃんが　おしえてくれたんだ」
レラの伯母
「近道をいきましょう」
レラの叔母の声
「森の入口でまち伏せ」
山がわの岸の男たちの声
「ペケレを　ころそう」
山がわの岸の女たちの声
「ペケレをころそう」
ピューッと　縄文笛の音
ドドドドッと　縄文太鼓の音
ペケレ
「（スポットの中で　スローモーションではしりつつ）あっ　森の入口に　もう　山がわの岸のひとたちが……
（方向をかえ）森にそって　けわしい山のほうにのがれよう（スローモーションではしり去る）」
暗黒
破壊的な音楽
ペケレの母の声
「いとしい息子のペケレが　森のきわを　にげていくわ」

（一一九）

ペケレの父の声
「そのあとを　山がわの岸のやつらが　追っかけていく」
ペケレの伯父の声
「はやく追いつこう」
ペケレの伯母の声
「はやく追いついて　ペケレをたすけよう」
海がわの岸の女たちの声
「ペケレをたすけよう」
海がわの岸の男たち
「ペケレをたすけよう」
破壊的な音楽
ヤマビイコの声
「（エコーで）オホーイ　レーラーちゃーん　オホーイ　ペケーレーくーんがー　森（もりー）に　はいーれーずー
けーわしーい　山（ヤマー）にー　むかっちゃーったーよー　オホーイ」
レラ
「（スポットの中で）けわしい山？　のぼりつめれば　道が切れて　断崖絶壁につきあたってしまうわ
（スローモーションで　はしりだし）この森をぬけ　先まわりして　山のいただきで　ペケレをまとう」
ヤマビイコの声
「（エコーで）オホーイ　気（キー）を　つけーて　いくーんだよー　オホーイ　レーラーちゃーん」
沈痛な　しかし　明るい春の光

（二二〇）

森の妖怪たち　いっせいに　とりどりの姿をあらわし　おどる
鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョ
「ハーハケッチョ　森は　いちにちいっぱい　まっぴるまのぴるぴるまだけれど」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「キラッ　キラッ　キラキラキラーラ　川をはさんだ　山がわの岸と　海がわの岸は　いちにちいっぱい
いがみあいの夜……」
朝露の妖怪ポロポロ
「ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン　りょう岸の　あらそいをとめようとした　レラちゃん
かわいそう　ペケレくん　かわいそう　ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン」
モモンガーの妖怪フワーテピュー
「フワーテピュー　レラちゃん　がんばれ」
小鳥たち
「レラちゃん　がんばれ」
モモンガーの妖怪フワーテピュー
「フワーテピュー　ペケレくん　がんばれ」
花たち
「ペケレくん　がんばれ」
鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョ
「じぶんをすてて　だれかをいかせば　一年じゅう　春の森が　あらわれる　フーフケッチョ」
小鳥たち

（一二二）

「一年じゅう　春の森が　あらわれる」
ヤチブキの妖怪キラーラ
「おたがいさまと　たすけあっていけば　一年じゅう　春の森が　ひらかれる　キラッ　キラッ
　キラキラキラーラ」
花たち
「一年じゅう　春の森が　ひらかれる」
溶暗
沈黙
暗黒
ペケレ
「（スポットの中　スローモーションで）やっと　いただきがみえてきた　もう一息だ（たちどまり
　風をかぎ）ああ　風だ　まちがいなく　山の頂上のほうから　ぼくにむかって　薫りたかい風が
　吹いてくる」
縄文琴のしらべ
はじめ　かすかに
やがて　ひびきたかく　ながれる
ペケレ
「レラだ！　ぼくの　未来のほうから吹いてくる　風……いのちの風だ」
縄文笛のしらべおこる
はじめ　かすかに

（一二二）

やがて　ひびきたかくながれる
レラ
「（スポットの中で　ペケレに手をのべ）ペケレ！」
ペケレ
「（にじりより）レラ！　ぼくを信じて！」
レラ
「（たちすくみ）おにいちゃんのこと？」
ペケレ
「（レラの手をとり）ぼくがとめたのに　たかい岩場を　とびこえようとして　足をふみはずし……（泣く）」
レラ
「（泣いて）ああ　おにいちゃん……（気をとりなおし）でも　ペケレ　あなたを信ずるわ」
ペケレ
「（レラと抱きあい）ありがとう　レラ」
レラ
「ペケレ　わたしたち　いつまでも　いっしょよ」
縄文笛のピェーッという音
血まみれの光の狂乱
山がわの岸のひとびとの　ワーッというかん声　せまる
ペケレ
「レラ！　いっしょに　にげよう！」

（一二三）

レラ
「もうこの先は　断崖絶壁　にげ道は　ないわ」
ペケレ
「じゃあ　ぼくたちは？」
レラ
「いっしょに　死にましょう」
ペケレ
「えっ」
レラ
「あなたは光　わたしは風　ふたりいっしょに　虹にうまれかわりましょう」
ペケレ
「虹に！」
レラ
「海がわの岸と　山がわの岸をつなぐ　虹に　うまれかわりましょう」
ペケレ
「うまれかわる！」
レラ
「わたしたち　きっと　ふたりで　虹をかなでるために　うまれてきたんだわ」
ペケレ
「きっと　そうだよ」

（一二四）

レラ
「りょう岸のひとたちの　こころとこころをつなぐ　虹のアーチなら　きっと　とおい北の海から
かえってくる鮭だって　その下をくぐって　川いっぱいに　のぼってくるわ」
ペケレ
「そして　りょう岸のひとびとも　そのアーチをくぐって　一年じゅう春の森にいける……」
縄文太鼓のドドドドッという音
血まみれの光の狂乱
山がわの岸のひとびと　姿をあらわして　二人にせまる
レラの伯母
「レラ！　ペケレからはなれて！」
レラ
「（しっかり　ペケレと抱きあい）もう　わたしたち　けっして　はなれないわ」
レラの伯父
「（弓に矢をつがえて狙い）ペケレ！　男のくせに　女を楯に　生きのびようとする　卑怯者め！」
レラ
「伯父さん　射つのなら　ペケレといっしょに　わたしも　射って」
レラの従姉
「レラ！　そいつは　あんたのおにいちゃんをころした　人非人なのよ」
レラ
「わたし　ペケレを信じているわ」

（一二五）

レラの弟
「（レラとペケレの間近かにせまり）こんな弱虫といっしょに死ぬなんて　レラおねえちゃん　山がわの岸のみんなの　恥だ」
レラ
「（ペケレと一緒に　崖のへりに　じりじりと後退し）これ以上ちかよらないで！　たとえ　血をわけた弟といえどもこれ以上　半歩でもちかづいたら　わたしたち　この断崖から身を投げて　死ぬわ」
レラの従兄
「（レラの弟とおなじように　レラとペケレの間近かにせまり）従妹のレラ　こんな　虫けらのようなやつといっしょに死ねば　あんたも　虫けらになりさがるぞ」
レラ
「（ペケレといっしょに　崖のへりに　ますます後退し）いいえ　わたしたちは　死んで　虹になるのよ」
山がわの岸のひとびと
「（口々に）虹に？　ばかな！」
破壊的な音楽
光の血まみれの狂乱
海がわの岸のひとびと　あらわれる
ペケレの母
「（人をかきわけ　半狂乱で　ペケレに近づき）ペケレ！　わたしの息子！（泣く）」
ペケレ
「（レラといっしょに　崖にたち）おかあさん　おとうさん　おじちゃんたち　ぼくとレラは　この崖から

とびおり虹になります」

ペケレの父

「（半狂乱で）虹に？　ばかな！」

ペケレ

「きいてください　海がわの岸のみんなも　山がわの岸のみんなも」

ペケレの伯母

「（泣いて　ペケレにつかづこうとし）ペケレ！　わたしの　かわいい甥っこ　さあ　こっちにおいで　おまえをたすけようとして　ここまでやってきた　海がわの岸の　みんなのもとに　おいで」

ペケレ

「（崖のへりで　爪先だち）これ以上　ちかづかないでください　伯母さん　でないと　ぼくたち　いますぐにでもここから　とびおります」

ペケレの伯父

「（絶叫し）やめろ　ペケレ！　崖から　はなれろ！」

海がわの岸の男たち

「崖から　はなれろ！　ペケレ！」

ペケレの従姉

「やつらの弓がねらいをさだめているから　レラを楯にして　こっちにおいで」

海がわの岸の男たち

「こっちにおいで！　ペケレ！」

ペケレ

（一二七）

「いいえ　ぼくらは　もう　けっして　たがいに　むこう岸のひとびとを　にくみ　かたきよばわりして
いがみあい　あらそいあう世界には　もどりません」
レラの従兄
「レラ　ペケレのくちぐるまに　のるな」
山がわの岸の男たち
「のるな　レラ」
レラの従妹
「ペケレの手からぬけだして　こっちにおいで」
山がわの岸の女たち
「こっちにおいで　レラ」
レラ
「いいえ　わたしたちは　もう　けっしんしたのです　この崖からとびおります　りょう岸のみんなが
たった一匹の鮭で　おなかいっぱいになるような　わかちあいの森の入口になります　虹のアーチになります」
りょう岸のひとびと
「(弓矢や棒をすて　手をのべ)　レラ!」
ペケレ
「レラは　もともとは　風として　この世にうまれてきました　そして　ぼくは　光のうまれなのです
さようならりょう岸のみなさん　レラは風です　すきとおった髪で　虹をかなでる　風です　いつまで
も　いつまでもふるさとの空に　なないろの　春のこころをかなでる　風です」
りょう岸のひとびと

「（手をのべ　声をそろえて）ペケレ！」
レラ
「さようなら　りょう岸のみなさん　ペケレは光です　風のわたしの　すきとおった髪を　まばゆい指
でつまびき虹をかなでる　光です　いつまでも　いつまでも　一年じゅう春の森へと　りょう岸のひ
とびとをみちびく虹のアーチです」
りょう岸のひとびと
「（泣いて　手をのべ）レラ！　ペケレ！」
ペケレとレラ
「神さま　わたしたちを　虹にしてください（ふたり　崖からとびおり　姿をけす）」
まばゆい虹の光　天地をもやす
りょう岸のひとびと　目をおおい　地にひれ伏す
まばゆい虹の光と音楽
しばらくつづく
光と音楽　しずかに平静になり
沈黙
レラのおじいちゃんの声
「（とおくのほうから　エコーで）オーイ　川に　虹の橋が　かかったぞー」
りょう岸のひとびと　ひとりずつ　スローモーションで起きあがり　断崖にちかより　のぞきこむ
レラの伯父
「（ペケレの父の手をとり　泣いて）虹だ」

（一二九）

ペケレの父
「（レラの伯父の手をにぎりかえし　泣いて）虹だ」
レラの伯母
「（ペケレの母の手をにぎり　泣いて）ペケレとレラの虹だ」
ペケレの母
「（レラの伯母の手をにぎりかえし　号泣して）おろかなわたしたちを　あらそいの地獄からすくい
だそうとして　レラとペケレが　虹になった」
レラのおじいちゃんの声
「（とおくのほうから　エコーで）オーイ　川いっぱいに　鮭が　のぼりはじめたぞー　かぞえきれな
いほどの鮭が　虹のアーチをくぐって　のぼりはじめたぞー　銀いろの笛を吹いて　のぼりはじめたぞー」
りょう岸のひとびと　いっしゅん氷り
やがて　つよくだきあう
ペケレの従兄
「レラとペケレが　いのちがけで　おれたちに　贈りものをしてくれたんだ」
レラの従兄
「じぶんたちのいのちを　かずかぎりない　鮭にかえて　おれたちの飢えを　いやしてくれたんだ」
ペケレの従姉
「ありがとう　レラ」
レラの従姉
「ありがとう　ペケレ」

（一三〇）

ペケレの従弟
「おれたち　もう　あらそいは　やめよう」
レラの従妹
「虹となった　ペケレとレラの　ないろの橋が　海がわの岸と　山がわの岸を　ひとつの郷(さと)に
むすんでくれたわ」
ペケレの父
「(レラの伯父と抱きあい)わしたちの　たいせつな　レラとペケレの　とおとい犠牲を　無駄に
することなくこれからは　りょう岸が　ひとつのこころになって　いつまでも　なかよく　わか
ちあって　くらしていこう」
レラの伯父
「どんな　つらく　くるしいことがおこっても　こころからはなしあい　ともに　たすけあって
いつまでもいつまでも　かしこく　くらしていこう」
ペケレの母
「(レラの伯母とつよく抱きあい　大声で泣いて)ああ　いとしい　レラとペケレ」
レラの伯母
「(大声で泣き)わたしたちが　ちゃんとしていたら　いつか　きっと　すばらしい花婿と花嫁
になっていたろうに……」
甘美な音楽
虹いろの光
かすかな歌声

(一三一)

ペケレの叔父
「あっ　虹が　うたいだした」
レラの叔父
「ペケレと　レラの　虹が……」
ペケレの叔母
「なないろの　うつくしい光の髪を　風の指で　つまびき」
レラの叔母
「虹になった　ペケレとレラが　もう死ぬことのない　一年じゅう春の声で　うたいだした」
りょう岸のひとびと　たがいにだきあい
片手を空にのべる
虹いろの光　天地にめぐる
縄文笛のしらべ
ペケレの声うたう
「レラ
ぼくの風
すきとおったこころの
糸をはりつめ
ぼくの指先で虹をかなでてくれる
レラ
ぼくの風

（一三二）

ふたつの岸を
虹のしらべでつなぐ
レラ
ぼくの風」
縄文琴のしらべ
レラの声うたう
「ペケレ
わたしの光
くらやみがふかいほど
あかるい指で
わたしのこころの糸を虹につまびく
ペケレ
わたしの光
ひととひとを
虹のアーチでつなぐ
ペケレ
わたしの光」
虹いろの光　天地をもやし
甘美な音楽きわまって

幕

（一三三）

11

カーテン・コール(1)
終幕時のりょう岸のひとびと　整列し　一礼
レラのおじいちゃんの声（エコーで）
「ことしも　川に　虹のアーチが　かかったぞー」
レラのおじいちゃん
「（すがたをあらわし　ゆっくりと　列に入りつつ）それからというもの　大気がつめたく冷えわたる秋になるときまって　川はばいっぱいに　大きな虹が　かかり　かぞえきれないほどの鮭の大群が七いろのアーチをくぐって　のぼってきたということじゃ（全員の列に入り　全員　一礼）」

12

カーテン・コール(2)
開幕前　カーテン・コール(1)のひとびとうしろにさがる
ヤマビイコの声
「（エコーで）オホーイ　いーちねーんじゅー　春(はーる)のー　森(もりー)のー　妖怪(よーかーい)たーち　オホーイ　すがーたー
あらーわせー　オホーイ　オホーイ」

幕

（一三四）

小鳥の声爆発
開幕
あかるく　華麗な　春の光
小鳥たちあらわれ　たのしそうに舞う
鶯の妖怪ハヒフヘホケッチョのうた
「（すたがをあらわし）
ハーハケッチョ
森は
春をパーン
ヒーヒケッチョ
森は
光でプーン
フーフケッチョ
森は
風にチューッ
ヘーヘケッチョ
森は
みどりへワーッ
ホーホケッチョ
ハヒフヘホケッチョ」

（一三五）

原子　修

小鳥たちのうた

「ケチョ　ケチョ　ケケッチョ
ケチョ　ケチョ　ケケッチョ」
いっ層華麗な　春の光と音楽爆発
花たち　あらわれ　小鳥たちといっしょに舞う
ヤチブキの妖怪キラーラのうた
「キラッ　キラッ　キラキラキラーラ
森は
いちにちじゅう
まっぴるま」
花たちの合唱
「まっぴるまの
ぴるぴるま」
ヤチブキの妖怪キラーラのうた
「キラッ　キラッ　キラキラキラーラ
森は
いちねんじゅう
春」
花たちの合唱
「春　春　春」

（一三六）

朝露の妖怪ポロポロ
「(泣いてあらわれ) ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン　ああ　崖から身を投げて　虹になった
レラちゃんペケレくん　かわいそう　ポロポロッ　なみだの朝露　ポロポローン」
モモンガーの妖怪フワーテピュー
「フワーテピュー　でも　じぶんを犠牲にして　りょう岸のひとびとをすくった　レラちゃん　ペケレくん
ありがとう (はしりまわる) フワーテピュー　フワーテピュー」
木の葉の妖怪ハッパッパたちのうた
「(あらわれ)
ハッパッパ
いちねんじゅう　春のこころで
ハッパッパ」
木の根の妖怪ネッコッコたちのうた
「(あらわれ)
ネッコッコ
いついつまでも　森のこころで
ネッコッコ」
シマリスの妖怪チョロッチのうた
「(あらわれ)
チョロッチ　チョロッチ
ささえあって　たすけあって」

(一三七)

ヒグマの妖怪ワォーレ
「（あらわれ）
ワォーレ　ワォーレ
わかちあって　いかしあって」
オオカミの妖怪ホホーレのうた
「（あらわれ）
ホホーレ　ホホーレ
こころの森は　いつも春」
シカの妖怪デモーネのうた
「（あらわれ）
デモーネ　デモーネ
ふるさとの森は　いつも春」
ヤマビイコの声
「（エコーで）そのー　森（もりー）に　きょーからー　レーラーちゃーんと　ペケーレーくーんがー
なかーまいりー　オホーレ　オホーレ」
レラのうた
「（ペケレと手をとりあってあらわれ）
春
春
じぶんをすてて

（一三八）

だれかをいかせば
森は
いつも　春」
全員の合唱
「いつも　春」
ペケレのうた
「虹
虹
おたがいさまと
たすけあっていけば
こころには
いつも　虹」
全員の合唱
「こころには
いつも　虹」
虹いろの光　天地にもえ
甘美な音楽きわまって
全員　礼のうちに

幕

（一三九）